

Career Path

profile

杉下 由行

1999.05 衛生局総務部地域保健課（広尾病院派遣）
2001.05 葛飾保健所予防課課務担当係長
2003.04 健康局医療サービス部感染症対策課課務担当係長
2005.04 福祉保健局健康安全室環境保健課課務担当係長
2007.04 国立感染症研究所派遣
2009.04 島しょ保健所小笠原出張所副所長
2011.04 健康安全研究センター微生物部疫学情報室副参事研究員
2014.04 中央区保健所健康推進課長
2016.04 福祉保健局健康安全部感染症対策課長



1999年 都立広尾病院臨床研修時代

当時は、都立病院で最初の2年間研修医として働き、その後保健所に配属されるというのが通常のコースでした。国家試験の合格後、5月から広尾病院での研修を開始しました。研修医同士、先輩後輩といった上下の区別もなく、とても仲が良く、休日、平日問わず常に研修医医局と一緒に過ごしていた気がします。皆で腕を出し合い留置針の手技を覚えたり、処方箋の書き方がわからず見よう見まねで覚えたりとそんなことが懐かしく思い出されます。一方で、検査オーダーのミスや診察のやり直し、鑑別診断ができなかったことなど失敗したことは今でもよく覚えています。広尾病院は島しょ医療も担っており、ヘリコプターによる救急搬送時の添乗や島での代診医としての勤務は大変得難い経験となりました。

2003年 感染症対策課課務担当係長時代

ちょうど重症急性呼吸器症候群（SARS）が海外で流行し、いつ都内に入ってきてもおかしくない状況で、非常に緊迫感のある中で対応に当たりました。課の保健師さんと一緒にSARS相談用のQ&Aを作成したのが最初の仕事でした。当時の課長がアラートだと言って、はじめは意味がよく分かりませんでした。これは、24時間体制で疑い患者の検査を行う仕組みのことで、この時名づけられた「東京SARSアラート」は、「東京感染症アラート」として今に引き継がれています。何事にも迅速性が求められ大変忙しい職場ではありましたが、自分で仕事を組み立て、優先順位を付けて進めていく力を養うことができたと思います。

2007年 国立感染症研究所派遣研修時代

国立感染症研究所実地疫学専門家養成コース（FETP）の9期生として2年間感染症の実地疫学について学びました。FETPは、1996年に堺市で起きたO157の集団感染事例を教訓として、各自治体に感染症対応ができる専門家を配置する目的で作られた組織です。都庁の感染症対策課では、実際に集団発生事例の対応、サーベイランスの実務に携わっていましたが、経験的な部分に頼ることも多く体系的に学ぶ必要があると考えていました。ステップに則ったアウトブレイク対応、サーベイランス情報の評価を学び、WHO西太平洋事務局での短期勤務も経験しました。また、国立保健医療科学院とのジョイントコースの中で研究も行い、公衆衛生修士を取得することができました。FETPで学んだ技術とそこで培った人間関係は、今でも大変役立っています。

2009年 島しょ保健所小笠原出張所副所長時代

出張所は父島にあり、所員は自分を入れて7人、都内で一番小さな保健所です。広尾病院と一緒に働いていた先生が父島診療所の所長として同じ時期に赴任されていて、病院時代のつながりがこの地で役立ちました。医療と保健の連携の中で島民の健康が守られており、診療所からの報告で感染症や精神の事例を探知することも少なくありませんでした。年に数回、住民健診での健康相談や小規模企業健診を実施するために母島に渡りました。小笠原は自然豊かなところで、

白い砂浜と青い海、きれいなサンゴが広がり、イルカの群れや大きなクジラがやってきます。海からの風が心地よく、真夏でもそんなに暑さは感じません。地平線に沈む夕日はとても美しく、夜には満点の星空が広がります。都会の喧騒の中で我々が普段感じなくなった自然を肌で感じるができる場所でもありました。

2011年 健康安全研究センター疫学情報室副参事研究員時代

疫学情報室では、感染症法に基づく全数及び定点把握疾患について都内保健所からの報告を週報としてまとめる業務を担当しました。FETPで学んだサーベイランスデータの収集、集計、解析、対策に従事する人への還元という一連の流れをきちんと理解した上で、データを扱うことができたと思います。また、新規の事業の企画、実施にも携わりました。センターの機能強化の一環として保健所の疫学調査を支援するチーム、TEIT（Tokyo Epidemic Investigation Team）を立ち上げ、さらに感染症に関わる人材育成を目的に保健所職員向けの研修を新たに開始しました。また、週1回、Web会議で感染症情報を発信する仕組みを整え、これにより保健所、センター、本庁が参加した上で、感染症週報を振り返り、アウトブレイク情報を共有することが可能となりました。

2014年 中央区保健所健康推進課長時代

中央区保健所では、中央区新型インフルエンザ行動計画を策定し、その上で聖路加国際病院と一緒に患者対応訓練を実施しました。また、結核コホート検討会（区内の結核患者全体の治療成績や結核菌検査情報の把握割合を評価する検討会）を新たに立ち上げ結核対策の強化を図りました。これまで携わることのなかった、監査、決算、予算、人事のほか、議会対応、組合対応など管理職としての業務についても多くの経験を積むことができました。予算要求では、現状がどうなっている、何が課題であり、それを改善することで、どう区民に役立つのか、費用対効果はどうか、そういった考え方が重要であることを区の幹部の方から教わりました。内部の検討のみならず区民や医師会等からの要望も踏まえ広い視野で総合的に判断していくことの重要性もここで学びました。

キャリアを振り返って

職歴を振り返るとほぼ2年おきに異動し、現在まで過ごしてきました。このように様々な職場を経験し、キャリアを積んでいけるのも東京都の魅力の一つだと思います。また、都の保健所だけでなく、区や市の保健所にも多くのポストが用意され、自治体を越え異動できるのも東京都ならではの特徴ではないかと思います。本人の適性や意向を踏まえた上で、異動は決まりますが、希望があれば私のように島の保健所を経験することもできます。魅力ある職場が数多くある東京都であたたかも公衆衛生医師として働いてみませんか。もし興味を持たれたならお気軽にお問い合わせください。

Career Path

profile

広松 恭子

1994.04 品川保健所予防課医療担当主査
1999.04 南多摩保健所地域保健推進室情報担当係長
2000.04 教育庁体育部学校保健担当係長
2001.04 狛江調布保健所保健サービス課長
2004.04 福祉保健局八王子保健所保健対策課長
2006.04 渋谷区福祉保健部地域保健課長
2009.04 福祉保健局保健政策部疾病対策課長
2011.04 福祉保健局保健政策部健康推進課長
2012.04 福祉保健局保健政策部担当部長（健康推進課長事務取扱）
2013.04 渋谷区健康推進部長 渋谷区保健所長兼務
2016.04 町田市保健所長



1994年 品川区品川保健所予防課医療担当主査時代

保健師、監視員など専門職と連携し、感染症・食中毒調査、結核や精神疾患などの未治療・治療中断者・居所不明者等への訪問同行、健康危機発生時の問合せに備え、関係部署向け・市民向け各Q&Aの作成、結核診査会（現感染症の診査に関する協議会）の症例提示、事業所健診結果票作成（当時）、区健康づくり計画の分担執筆などを担当しました。

この頃、結核罹患率の減少など、感染症が制圧されたかみえた一時期があり、情報化や価値観の多様化に対し、「健康教育ではなく健康学習」「地域づくり型保健活動」など業界全体でメイン機能の模索をしていました。その矢先、新興再興感染症や阪神淡路大震災など健康危機が頻発し、保健所が健康危機管理の地域第一線の事業所として再認識されました。

1999年 南多摩保健所地域保健推進室情報担当係長時代

管轄3市の健康主管課との調整、保健医療専門職向け研修の企画実施のほか、圏域独自事業（当時）として多摩ニュータウンに住む高齢者の健康資源調査と提言、子ども虐待予防スクリーニングシステム（南多摩方式）の立ち上げなどを行いました。

2000年 教育庁体育部学校保健担当係長時代

「児童生徒の学校健診結果報告書」の作成、長期休職者の復職支援、給食業務視察、学校保健システムについて委員会と各種調整を行いました。都議会文教委員会に、チームの一員として答弁調整の手順を初体験しました。この他、当時、三宅島噴火により避難してきた三宅島の小、中、高校生の臨時学校健診や、養護教諭のサポートを行いました。

2001年 狛江調布保健所保健サービス課長時代

いわゆる人事管理も、親切な事務の先輩課長の指導をうけながら初めて経験しました。対外的な代表として管轄市の各種会議にも参加しました。また、当時、教職員・外科系開業医師等の結核発症が多発し（接触者が多く、医師会や地域で不安が大きく風評被害が懸念されたため）、国レベルの専門家を招聘して地域対策会議を開催しました。この他、保健所の再編およびそれに伴う地域精神保健の役割分担変更などについて地域関係機関との調整もしました。管理職として産業医意見をききつつ、職員のメンタルヘルスラインケアも実施しました。

2004年 八王子保健所保健対策課長時代

神社を中心にした各町会の祭りを伝える、代を重ねた住人が中心の地域と、近年開発されたニュータウン、同じ市民でも対照的なソーシャルキャピタル効果を実地体験しました。易感染宿主の生活施設が多く蜂窩織炎や疥癬など、法定以外の感染症の相談も多かったです。所長の意向で、食品衛生、環境衛生部門と感染症担当との合同検討会が開かれ連携よく対応できたと思います。

2009年 福祉保健局保健政策部疾病対策課長時代

献血推進計画・血液事業、被爆者・被爆2世支援、難病対策、ウイルス性肝炎対策、透析医療、など、保健所では事務職の主担当分野を改めて経験しました。医学的新知見や患者団体の活発化などの環境変化を踏まえて、医療費助成対象の政策的見直しや広報を実施しました。

また、ウイルス肝炎医療費助成の実施医療機関の医師に直接連絡してデータを収集し、専門医会議にて治療効果報告書を作成しました。

2011年 福祉保健局保健政策部健康推進課長時代

全庁的な東日本大震災の支援体制の中、業務開始。各分野の専門家の先生方のご意見をいただき、局内、庁内外の調整をすすめ、健康増進計画、がん対策推進計画の改訂に携わりました。がん対策では、がん検診の受診率向上キャンペーンや、市町村担当者と共にレベルアップするための情報提供方法の見直し、がん登録事業の開始、など、大きなテーマをさまざまな切り口から深める仕事ことができました。

2015年 渋谷区健康推進部長兼保健所長時代

結核対策の応用編ともいうような様々な集団対応（分娩施設、幼稚園受験塾、私立高、警察）、70年ぶりの国内デング熱蔓延対策を行いました。国立感染症研究所や国の担当者、渋谷区医師会など、本当に現場対策に協力していただき、ネットワークの力を実感しました。

2016年 町田市保健所長時代

保健所政令市となって5年目、集団の経験知がもつ力の有無の違いを実感しました。全国保健所長会政令市部会の会長市を担当しています。

キャリアを振り返って

入職前は、病院の内科医として、病棟、外来、在宅の患者さんを診ていました。保健所で地域のネットワークを組む時に臨床経験が役立っていると感じる場面は多々あります。他にもさまざまな経歴の公衆衛生医師がいて、個性を発揮しており、都内の先輩や同僚にいろいろ相談できます。もともと保健所はチームで仕事をすすめていくところなので、コミュニケーション能力が豊かな方は、特に活躍しやすいと思います。「公衆衛生にかかわる事件があったときには、朝のニュースとともに、仕事が始まる。」社会とつながる感覚をぜひ体験してみてください。